

香港における日本語学習と 日本のポピュラーカルチャーの関連 —内発的動機づけの観点から—

北海道大学

小林由子

yoshikoba@oia.hokudai.ac.jp

本研究の目的

- 香港で日本のポピュラーカルチャーに興味を持つ日本語学習者が、どのような学習動機づけを持っているかを明らかにする
- その知見をマンガなどのポピュラーカルチャーを媒介とした日本語学習支援に活かす

本プロジェクトで行ったこと1

- 2015年 インタビュー調査(香港大学)
- 2016年 質問紙調査(香港大学・香港理工大学)



インタビュー結果の質的分析(報告書に記載)
 質問紙の開発
 質問紙調査の実施
 内発的動機づけ理論の観点からの検討(報告書に記載)
 質問紙調査の結果の量的分析(進行中)

本プロジェクトで行ったこと2

【口頭発表】

小林由子(2016a) 香港の大学生はどのように日本語を学んでいくのかーポップカルチャーとの関連を中心にー、国際シンポジウム「東アジアのコミュニケーションを考えるー多層言語社会香港からの示唆ー」、2016年3月、於:北海道大学

小林由子(2016b) 香港におけるポップカルチャーをきっかけとした日本語学習動機を分析するための理論的枠組み、公開シンポジウム「日本人から見る多層言語社会香港」、2016年6月、於:香港大学

小林由子(2017a) 香港における日本のポピュラーカルチャーは日本語学習とどう関わるか、国際シンポジウム「多層言語社会の外国語教育」、2017年3月、於:北海道大学

Kobayashi, Y. (2017b) Motivational Theory as a backbone of Language Learning in Multilingual Environment, in Diverse Landscape of Language Teaching in Asia: What Language Teachers Can Learn from Each Other (Kawai, Y., Kobayashi, Y., Sano, A. and Mitugi M.) The 34th International Conference of English Teaching and Learning, 2017年5月、於:高雄大学

小林由子(印刷中) 多文化交流科目「文化としての日本マンガ」で留学生はなにを学ぶのか、日本語教育方法研究会、2018年3月24日(予定)、於:名古屋大学

【論文】

小林由子(2016c) 「日本語学習における「内発的動機づけ」の再検討」『北海道大学国際教育研究センター紀要』20, 81-92.

本発表の内容

- 報告書では小林(2016a, 2016b, 2017b)を中心に、ポピュラーカルチャーをきっかけに日本語を学ぶようになった香港の学習者の現在の日本語学習動機に違いがあることを示し、内発的動機の観点から、どのように考えることができるかを考察した。
- 本発表では、報告書の内容に加えて、複言語主義・自律学習とポピュラーカルチャー(マンガ)を使った実践の観点からも、本プロジェクトの総括を行う。

背景

- 日本語学習のきっかけとして挙げられる「日本のポピュラーカルチャー」の多さ(国際交流基金 2017、宮副 2007)
- ポピュラーカルチャーは学習のきっかけにはなるが日本語学習との関わりは薄いとする先行研究(臼井 2014、根本 2016)
- ただし、先行研究では動機づけ理論からの考察はされていない
- 香港では、日本のポピュラーカルチャーが「集団的記憶(集體回憶)」となっている
- では、香港において、日本語学習者の学習動機づけと日本のポピュラーカルチャーはどのように関わるのか？

インタビューの結果（小林 2016a）

	A	B	C	D
日本の大衆文化が好き	◎	◎	◎	◎
好きな日本の大衆文化	ゲーム	アニメ ラノベ	アニメ ドラマ	ゲーム ゲーム実況
大衆文化からの関心の広がり	◎	◎	◎	◎
大衆文化以外の日本への関心	○	○	—	—
大学以前の日本語学習	○	×	×	○
大学以前の自らの日本語評価	○	○	×	○
大学以後の自らの日本語評価	△	△	○	○
大衆文化理解のための日本語	○	◎	△	◎
日本語学習キーワード	学術的 専門的	日本の会社で やっていける	母語話者並みの 発音	—
今後の展望	ゲームの仕事→ 日本の会社	日本に住む	香港の公務員 または銀行	ゲームに関する 研究

インタビュー結果の考察：対象者のちがい

- どのような「日本のポピュラーカルチャー」が好きか
- 「日本語を学ぶ」ことが**目的**なのか、**手段**なのか
- 「日本のポピュラーカルチャー」が**目的**なのか
- 自らの日本語に対する評価



内発的・外発的動機づけ理論からの検討

内発的動機づけと外発的動機づけ

- 内発的動機づけ
 - 学習内容・学習することそのものが目的(学習の**目的性**が高い)
- 外発的動機づけ
 - 何かのために学ぶ(学習の**手段性**が高い)
- 一般的に、内発的動機づけのほうが好ましいとされている
 - 学習の継続性
 - より精緻化された学習方略(堀野・市川 1997)
 - 成績への有意な影響(堀野・市川 1997)

自己決定理論

(Ryan & Deci 2009 図は櫻井2012による)

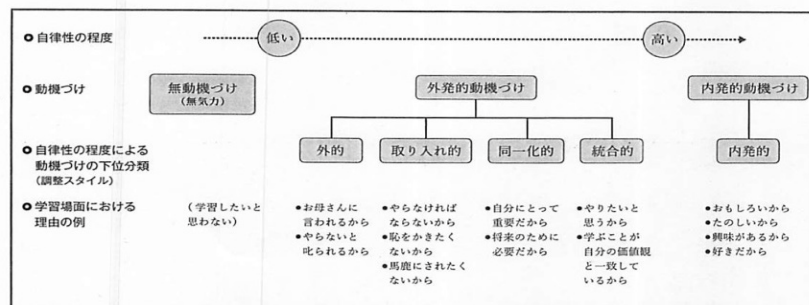


図2 自律性の程度による動機づけの分類

自己決定理論の問題点

- 「内発的」になることが目標なのか？
- 手段として「なにかのために学ぶ」ことはよくないのか？
- 「学習・学習内容の目的化」と「学習の自律化」を同一視してよいのか？

すなわち

- 「自律化」こそが重要なのでは？
- 「学習の手段性」が再評価されてもいいのでは？
→ 学習動機の二次元モデル(手段/目的性と自律性の分離)

動機づけの二次元モデル

(自律的動機づけ形成のデュアルプロセスモデル(伊田 2015))

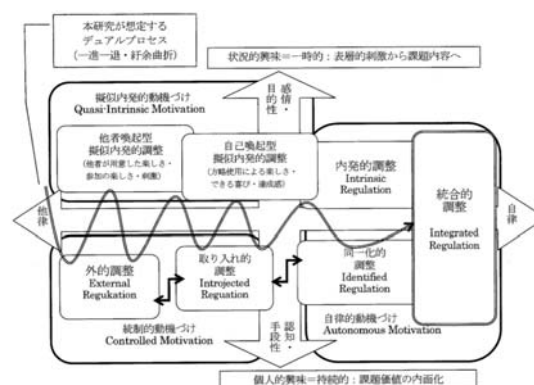


Figure 4 自律的動機づけ形成のデュアルプロセスモデル
(速水, 1998および伊田・乾, 2011をもとに作成)

「自律的動機づけ形成のデュアルプロセスモデル」の特徴

- 最終ゴールは「統合的動機づけ」(学習が「手段的」でも「目的的」でもかまわない)
- 内発的動機づけは自律性の度合いによって段階がある。
- 学習の目的性が高い場合、「他者喚起的疑似内発的動機づけ(他者から与えられる楽しさ)」→「自己喚起的疑似内発的動機づけ(方略を使うなど自らによる楽しさ)」→「内発的動機づけ(学習そのものが目的)」→「統合的動機づけ(やりたいから)」の順に自律的になっていく
- 最終的な「統合的動機づけ」の段階では学習の手段性・目的性は問題にならない
- 学習者の内発的動機づけのモデルとしては、こちらの方が適切なのではないか

動機づけの二次元モデルから見た 香港の日本語学習者の動機づけ

- 日本のポピュラーカルチャーが「他者喚起的疑似内発的動機づけ(他者から与えられる楽しさ)」として学習のきっかけになる
 - 「自己喚起的疑似内発的動機づけ」
(日本語を使う楽しさ)
 - 「内発的動機づけ」(日本語を学ぶ楽しさ)
 - 「統合的動機づけ」(やりたいから日本語を学ぶ)
(日本語学習は手段的/目的的)
- …と、香港の学習者は自律化していったのではないかと

複言語主義と学習者オートノミー (青木 2018)

• 複言語主義と学習者オートノミーの関連

- 複言語主義: 人の言語体験は「言語」や「文化」という単位で切り離されるわけではなく、複数の言語と文化の相互作用によって新しいコミュニケーション能力が育つ。人は状況と自分の目的に合わせてその能力の適当な部分を**自律的に**取り出して使う。

複言語話者を育てるための言語教育に関する5つの提案 (Little 2017)

1. 能力の程度にかかわらず必要な時に必要な言語が使えるためには、学校で学んだ言語が日常生活の言葉(everyday lived language)になる必要がある。そのためには、言語使用の機会を作らなくてはならない。
2. 授業での言語使用は、学習者が主体的に、自分の興味・関心に基づいた本物のコミュニケーションを行えるようにする必要がある。
3. 授業で目標言語を使うことは重要だが、それと同時に、目標言語の能力不足は、他の言語の能力や語用論的、社会言語的能力で補うという姿勢も大切である。
4. メタ言語的、メタ認知的内省を促すことも大切。
5. 頭の中でも、実際の言語使用でも、複数の言語が混在しているかもしれないが、目標言語の能力を最大限に伸ばすには、目標言語で頑張る姿勢も大切。特に書くことは大切。自分の選んだトピックで自己表現をすることで、目標言語がアイデンティティの一部となる。

授業実践「文化としての日本マンガ」

(小林 印)

刷中)

- 多文化交流科目「文化としての日本マンガ」
- 留学生と日本人が日本語で「自ら発見するため」の授業
- 2015年度より4期にわたって実施
- 授業内で観察されたこと
 - 主体的な自分の興味・関心に基づいた本物のコミュニケーション
 - 留学生・日本人学生とも日本語の能力不足を言い換え・絵・スマートフォンなどで補う
 - 留学生による日本語授業で学んだ日本語の意識的な使用・日本人学生の意識的な日本語の使用(メタ認知)
 - 目標言語での自己表現(目標言語のアイデンティティ化)
- 日本のポピュラーカルチャーを媒介とした授業が複言語話者を育てることに貢献できるのではないか

報告書に掲載していない参考文献

- 青木直子(2018)学習者オートノミーを育てる教育実践:これまでの蓄積と新たな展開、第11回大阪大学専門日本語教育研究協議会スライド
- 小林由子(印刷中)多文化交流科目「文化としての日本マンガ」で留学生はなにを学ぶのか、『日本語教育方法研究会誌』50(2)
- Little, D. (2017). Language learner autonomy and plurilingual repertoires. Plenary talk given at 13th Nordic Workshop on Developing Learner Autonomy in Language Learning and Teaching, Helsinki University, 25 August 2017
- 櫻井茂男(2012)夢や目標をもって生きよう! 自己決定理論、鹿毛雅治(編)『モチベーションを学ぶ12の理論』金剛出版 pp.45-71